

---

# Summer memories

鳳凰院朱雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S u m m e r   m e m o r i e s

### 【Nコード】

N 2 1 3 8 A

### 【作者名】

鳳凰院朱雀

### 【あらすじ】

夏季、流璃、星那の三人の少女たちは夏休みにキャンプに行くことになった。キャンプに行った先で、三人は美しいが、不思議な少女と出会い……。

## 始まり

### 1．始まり

三人の少女たちは今、あれこれと夏休みの計画を立てて居た。

「ねえ、夏休みどこ行こつか？」

と、最初に言ったのは南川<sup>みながわ</sup> 夏季<sup>なつき</sup>。

この三人の中では気が強く、肩まである長い髪を、高い所で一つに束ねており、このグループの中の一人、睦月<sup>むつき</sup> 流璃<sup>るり</sup>とほぼ毎日喧嘩をしている。

別に仲が悪いとか、そういう訳では無いのだが。

それにそんなに仲が悪いのなら、とくに二人は別々に行動して居るだろう。

「んなこと言われてもねー……。別に特に行きたいところがある訳

でもないし……。星那<sup>せいな</sup>、どっか行きたいところある？」

「んー……。今考え中……」

星那こと水無月 星那は、流璃と夏季が喧嘩した時、いつも止めに入る宿め役だ。

彼女が居るからこそ、このグループは上手く行って居ると言っても過言ではない。

「つーか、そういうアンタはどうなのさ？ 私たちにばっか聞いていないでアンタもどこに行きたいのか言いなさいよ」

流璃のこの一言が、喧嘩の火種になった。

「……………ちよーつと流璃？ そーゆー言い方は無いんじゃない？！」

（ああ もう）

星那は心の中で頭を抱えた。

「だってこーゆー言い方しか出来ないんだからしょうがないでしょ？」

「……………アンタのそういう所がかなりム力つくんですけど？」

「んなこと知らないわよ。つかうるさいんだけど？ いい加減にして

くんない？」

「……………なんですって？つか元はと言えばアンタのせいでしょうっ！？」

「……………なんで私のせいなのよ？」

「だってそうでしょーが！？」

ギヤーギヤーと騒ぐ夏季と流璃。

「二人ともー もう止めなよー ねっ？」

星那のその一言に夏季と流璃の動きが止まる。

（良かった 止めてくれて）

と、星那が安心したのも束の間。

暫くしてまた二人は喧嘩を再開した。

とつとどつちかが折れれば良いのにとされるだろうが夏季も流璃も負けず嫌いなので、自分から折れる事は絶対にしない。

宥め役の星那がいないと、一日中ずつとでも喧嘩をしているだろう。しかも一回『止めなよ』と言うだけでは済まないで、二、三回注意をしないとイケない。

「二人ともっ！もう止めなっ！」

星那が怒鳴った。すると二人は今度こそ喧嘩を止めた。

「もう喧嘩しないでね？」

星那が言った。

「それは絶対無理だね」

夏季と流璃が同時に言った。

「……………だよね」

分かってるのに何でこんな事を……………と星那は思い、心の中で自嘲した。

「……………まあそれは置いて、本題に戻ろっか」

夏季がそう言い、仕切り直す。

「さて、何処に行く？」

暫く沈黙が三人を包む。

10分ほど経っただろうか。不意に星那が沈黙を破った。

「……一つだけ心当たりがあるんだけど……」

「そうなの？ 何処？」

夏季が身を乗り出して星那に聞く。

「うん。あのね、Y県のN湖なんだけど……三年くらい前かな……家族でそこに行っただ。それで、すっごく綺麗な所だったから……また行こうって言ってたんだ」

「へえ……。じゃあそこにする？」

その話を聞いて流璃が言った。

「そうね。私も行ってみたい！」

夏季も楽しそうに言う。

「じゃあそこにしようか」

この星那の言葉に二人も頷く。そうして、そこに行くことが決まったのだった。

夏季が身を乗り出して星那に聞く。

「うん。あのね、Y県のN湖なんだけど……三年くらい前かな……家族でそこに行っただ。それで、すっごく綺麗な所だったから……また行こうって言ってたんだ」

「へえ……。じゃあそこにする？」

その話を聞いて流璃が言った。

「そうね。私も行ってみたい！」

夏季も楽しそうに言う。

「じゃあそこにしようか」

この星那の言葉に二人も頷く。そうして、そこに行くことが決まったのだった。

## 2・出発

### 2・出発

美しい青空の下

駅の前に立っている二人の少女が居た

琉璃と星那である。二人はまだ来ない夏季を待っていた。

「ったくあの遅刻魔……。時間を守った試しが無いんだから……」

「まあまあ。夏季にもいろいろな事情があるのかもしれないし……。もうちよつと待ってみようよ」

「事情？どうせ寝坊して遅いんでしょ」

琉璃は腕を組みながら冷ややかに言った。

「そうかなあ？」

「そうよ。絶対そう」（決め付けるなよ……）

星那は心の中で琉璃に突っ込んだ。

「いつやー。ごめんごめん。すっかり寝坊して遅くなっちゃった」  
聞き覚えのある声で二人は顔を上げた。

目の前には全然慌てる様子の無い呑気な声でそう言った遅刻常習犯の夏季が立って居た。

『ほら、やつぱり寝坊して遅刻して来たでしょ？私の言う通り』

『……………うん』

「何二人でこそこそ小声で話してんの？」

「別に……………」

琉璃はぶっきらぼうに答えた。

（そーゆー態度取られると、すっごく気になるんだけどなあ……。まあいっか）

夏季はそう思った。

「……………そんな事より早く行かないと間に合わないわよ」

そう言つと、琉璃はいきなり走り出した。

「えっあつ！ちよつと待ってよ琉璃ー！」

星那も琉璃の後に続く。

「二人とも足速過ぎっ！私を置いてくなーっ！」

夏季も慌てて走り出す。

「アンタの足が遅いだけよ」

容赦のない流璃の言葉。

「……悪かったわねっ！どうせいつつもビリよっ！」

夏季が叫ぶ。

「二人とも走りながら喧嘩しないでよ…… 電車に乗り遅れちゃうじゃんっ。」

「そうだった…… 急がなきゃっ！」

『二番線、電車が発車します……。お乗りの方は……』

「ぎゃーっ！待ってえ！その電車ーっ！」

電車の扉が閉まる。

「……間に合ったー……。よかったー……」

ほっと息をつく三人。

「……全く、アンタが遅いから……」

流璃がさも呆れたように溜め息をついた。

「……悪かったわねっ」

ふんつとそっぽを向く夏季。

「まあまあ もう許してあげたら？それにココ、電車の中だし……。周りの人に迷惑でしょ？」

星那が宥める。

「それもそうね……。もういいわ。許してやるわよ」

「そりゃあどうも」

精一杯の皮肉を込めて夏季が言った。

「星那、目的地にはどれくらい掛かるの？」

「ん〜と……。2時間くらいかな」夏季の皮肉たっぷりの言葉を無視して、星那に尋ねる。

「ん〜と……。二時間くらいだと思っ」

星那が答える。

「結構近いのね」

「そうだね」

二時間後、Y県に着き、電車から降りた。

「……………あーっ！もー疲れたーっ！」

夏季が大声で叫んだ。

「煩いわねえ……………。疲れてんのはアンタだけじゃないのよ？私だって星那だつて疲れてんだから」

鬱陶しそうに言う流璃。

「でもまだ歩くよー。頑張つてー」

星那は全く疲れていないらしい。

「……………誰が疲れてるって？」

夏季は隣にいる流璃を小突いた。

「……………」

流璃は黙り込んでしまった。

（何か言えよ…………）

夏季は黙り込んでしまった流璃を見て、そう思った。  
さらに数時間後。

「……………ねえ、星那。ほんとにこの道で合ってるの？」

最初に口を開いたのは夏季だ。

「……………なんかさっきから同じトコぐるぐる回ってる気がするんだけど……………」

続いて流璃が口を開く。

「……………」

星那はさっきから黙りこくって居る。

「……………星那？」

心配した夏季が尋ねる。そしてやっと星那が重い口を開いた。

「……………迷った、みたい……………」

「……………えっ？ 今なんて……………」

流璃と夏季は我が耳を疑った。

「迷ったみたいって言ったの」

この星那の一言に二人は愕然とした。



「『迷った』って……。これからどーすんの!？」

夏季が焦った様子で言った。

「『どーすんの』って言われても……。どうしようっ」

「星那の馬鹿ーつつっ!！」

夏季が叫ぶ。

「ご、ごめえんつつ！」

「とりあえず落ち着きなさいよ夏季」

流璃が冷静に言った。が。

「コレが落ち着いてられるかゝつつっ!！」

パニック状態の一行。（特に夏季）

「あの……………」

### 3・謎の少女

「えっ？」

澄んだ美しい声に夏季達は声のした方  
自分達の後ろを見た。

そこには大きな麦わら帽子を被り、袖なしのシンプルなワンピース（だと思う）を着た肩より長い艶やかな漆黒の髪をおろしている美しい少女が居た。

その風貌から、彼女は昔の女優のように見える。  
恐らく夏季たちより年上だろう。

そう思わせる雰囲気は彼女にはあった。

夏季たちは暫くその少女に見惚れた。その少女は夏季たちに尋ねた。

「一体どうしたんですか？こんな所で……」

少女の問い掛けに、三人ははっと我に返る。

「……あつ。もしかして地元の人ですか？」

星那が尋ねる。

「ええ」

「……あの……。非っ常に言いにくいんですけど……。実は……」

星那はかくかくしかじかと事情を説明する。

「そっか……。道に迷っちゃったのね」

「そうなんです……。すみませんが道……、教えて頂けますか？」

「ええ。いいわよ」

「ほんとですか！？ありがとうございます！助かります！」

「じゃあ着いて来て。案内するわ」

そう言うと、彼女は三人に着いて来るよう促した。

夏季、流璃、星那は言われるがままに少女に着いて行く。

「あそこよ」

少女は立ち止まり、そう言うと、前方を指差す。

その先には美しい湖が顔を出していた。

さらに先に進むと、水の清々しい匂いが鼻をくすぐった。四人は湖の近くに歩み寄った。

「……………や、やっと着いた……………」

荷物を置きながら、夏季は呟いた。

「そうだね よかった」

星那も疲れたように呟く。

「でも、本当にありがとうございました」

星那が本当に感謝を込めて少女に頭を下げながら言う。

「いえいえ。役に立てて良かったわ」

少女が笑顔で答える。

「あの……、名前……、教えて頂けますか？私は水無月 星那と言  
つて、あの髪の短い子が睦月 流璃。髪を一つに結んでいるのが南  
川 夏季です」

星那は簡単に三人の自己紹介を済ませた。

「私は、鈴音。皐月 鈴音よ」

「またね」

鈴音はそう言つと、長い髪を揺らし、森の奥へと去つて行つた。

その夜。夏季、流璃、星那の三人はテントの中で他愛も無い会話に  
華を咲かせていた。

話している途中、夏季は不意に今日会つた美しい少女 鈴音の事  
を思い出した。

「ねえねえ、そういえばさあ、今日道を教えてくれた鈴音さんつて、  
すつごく美人だったよねー」

「あつ、そうだね すつごく美人な人だったよね 私思わず見とれ

ちゃった」

星那が言う。

「星那も？実は私も思わず見とれちゃったんだよね」

「……………確かに、美人だったわね」

流璃が言う。

「……………へえ。流璃もそう思ったんだ」

夏季がさも意外そうな視線を流璃に注ぎ、言った。

「……………何よ？どう言う意味？」

夏季の視線に、流璃は罰の悪そうな顔をした。

「だって、流璃がそんなに素直に他人の事褒めるなんて今まで無かったじゃん」

「……………失礼ね。まるで私がいつも他人を見下してるみたいに……………。私だって他人を褒める事ぐらいあるわよ」

「へえ、そうなんだ。ふーん」

夏季がにやにやしながら言う。そんな夏季の顔を見て、流璃は呆れてしまった。

「……………馬鹿らしい。んな事より早く寝なさいよ。明日も早いんだか

ら」

琉璃は夏季と星那に背を向け、寝袋の中に入ってしまった。

(……………鈴音さんは本当に美人だったけど、何故かしら？何となく、この世のものでは無いような、そんな不思議な感じを受けたのは)

琉璃は寝袋の中でぼんやりそう思った。

(……………きっと、彼女が纏っていた涼やかな雰囲気のせいね)

琉璃は今日出会った昔の女優のような少女の事を思い出していた。そしてそのまま深い眠りにおちて行った。

翌朝。  
。

(……………もう朝か……………)

星那は、ふっと目が覚めた。

両脇には琉璃と夏季がすやすやと規則正しい寝息を立てている。

(昨日、よつぽど疲れたんだろうなあ………………。まあしょうがないか)

そう思い、寝袋から出、テントの外に出る。

キャンプの朝独特の、ひんやりとした空気が頬を撫でる。

しばらく歩くと、星那は湖の側に人影を見つけた。

(……………誰だろう？こんなに朝早く……………)

星那はそう思い、人影の近づく。  
少し近寄ると、一人の少女が湖を無言で見つめていた。  
艶やかな漆黒の長い髪、鈴音だった。

(……………鈴音さん?)

星那は鈴音を見つめている。暫くして、鈴音が星那の方を向いた。

「……………あなたは昨日の……………」

鈴音は驚いたような顔をしている。

「お、お早うございます。お散歩ですか？」

星那はそう言い、鈴音に歩み寄る。

「ええ。……………確か星那ちゃん、だったわよね？」

鈴音は昨日と同じような袖なしのワンピースに大きな麦わら帽子を被っていた。

「はい。そうです」

星那が答える。

「星那ちゃんは、こんなに朝早くどうしたの？」

「私も鈴音さんと同じです。早くに目が覚めちゃって……………」

「そうなんだ。後の二人……………、夏季ちゃんと琉璃ちゃんは？」

「まだ寝てます」

「そう。まだ早いものね」

そう言うと、微笑んだ。

暫く鈴音と星那は楽しくお喋りをしていた。

そしていつの間にか、夏季と琉璃も加わり、4人で談笑する。その中で鈴音の事が少し分かった。

三人と同じ15歳である事。山の奥で一人で暮らしている事

。

「あ、ねえねえ、鈴音ちゃんも一緒にご飯食べようよ」

夏季が唐突に言う。

「……………えっ？でもいいの？」

「うんっ！全然いいよ ねっ二人とも！」

「うん」

「ええ。……………つつても今から作るんだけどね」

「……………本当？じゃあおじやましようかな？」

「うん そうと決まれば早速作ろう！」

「私も手伝っわ」



「ほんと？ごめんね　ありがとう」

数分後

「出来たっ」

「そうだね　おいしそう」

星那が嬉しそうに言う。

「じゃあ食べよっか」

朝食を食べながらまたもや四人は楽しくお喋りをした。

そんな感じで、四人は毎日のように語り合った。日々は何事も無く過ぎて行った。が。

ある事件が起こった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2138a/>

---

Summer memories

2010年10月28日08時34分発行